

声

患者体験を経て、今、
看護師に届けたい
“声”があります。

医療常識の向こう側

東日本大震災（2011年3月11日）の2週間後、自損事故により心肺停止の状態にて病院に運ばれました。首を脱臼骨折し、背中も傷めていると聞かされたとき、「あっ。もしかして、歩けないのかな」と思ったのですが、実際はそれ以上たいへんなことを後で聞かされました。

急性期病棟で三カ月を過ごした後、回復期病棟に転棟してはじめて車椅子に乗りました。「車椅子に乗れば自分で動かせる」と思っていたのですが、手も動かないと気づき、「こりゃ、たいへんだなあ」と思いました。

はじめてカニューレが取れ発声できたときには、病棟中の看護師が集まってくれて涙を流して喜んでくれました。医学の常識には考えられないことも、患者の思いにすこしでもチャレンジしてくれる人がいます。チャレンジしてもダメなら諦めもつくかもしれませんが、そういう看護師がたくさんいると入院してかんばっている人のモチベーションが上がるのではないかと思います。患者にとって看護師は体の支えであると同時に心の支えでもあります。家族より患者と長く接していることになるかもしれない尊い職業だと思うので、がんばってほしいと思います。



原本隆弘

脊髄損傷者友の会 (<http://sekison.link/>)、埼玉県支部支部長。

